

生徒の自学自習を促す教師の関わりについての考察

— 個人内評価と自己評価のあり方に焦点を合わせて —

教職実践専攻・ミドルリーダー養成コース

学籍番号 22GP103 氏名 葛西 史生

1 はじめに

本校は、学校教育目標で生徒の「自学自習」を掲げている。辞書的には「自学」とは「人にたよらず自ら学ぶこと」、「自習」とは「自分で学習すること」(広辞苑第七版)という意味であるが、ここで掲げている「自学自習」は単に家庭学習を指すのではなく、生徒の様々な成長を期待しているものだと捉えている。また、中央教育審議会答申(2021)は「自ら学習を調整しながら粘り強く学習に向かう態度等の育成」について記述しており、「自学自習」はこの中の「自ら学習を調整する」面と「粘り強く学習に向かう」面に関わる。

自立した社会人・職業人として生きていくために必要な資質・能力について、中央教育審議会答申(2011)が「分野や職種にかかわらず社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力」として提示した「基礎的・汎用的能力」が初等・中等教育段階の学校を中心として浸透している(藤田, 2020, p. 14)。この基礎的・汎用的能力は、「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」の4つに整理される。この中の「自己理解・自己管理能力」は、自分が「できること」、「意義を感じること」、「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力である。また「課題対応能力」とは、仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立てその課題を処理し、解決することができる力である(中央教育審議会, 2011, pp. 25-26)。このように、先述した2つの面はキャリア教育の面からも重要であることがうかがえる。

上記のことを踏まえて、本研究は「自学自習、すなわち生徒が自ら学習を調整しながら粘り強く学習に向かう態度を身に付けること」を促す教師の関わりについて検討することを目的とする。本研究を通して、自学自習の概念について本校教員と共有することは、学校教育目標達成に向けて意義のあるものだと考える。

2 研究にかかわる概念整理

本節では、上記の方略を検討するにあたり、まず関連する概念の整理を行う。その上で、本研究における問いを明確化することを目指す。

(1) 内発的動機づけについて

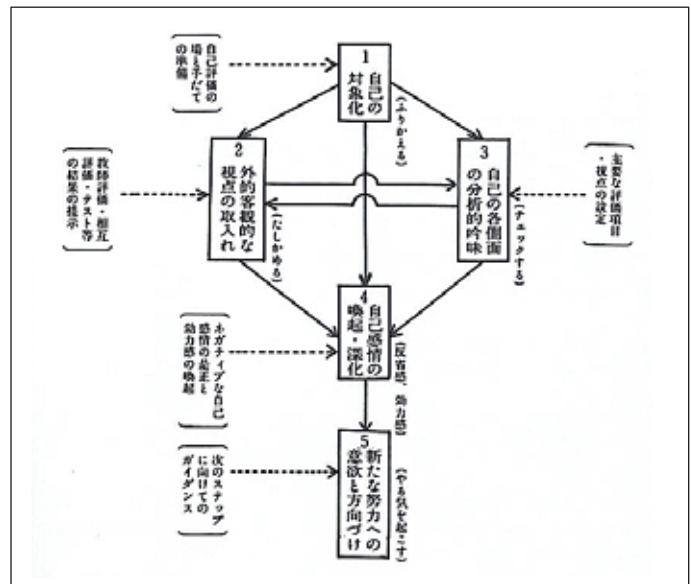
自己調整学習とは、学習者が、習得目標の達成をするように体系的に方向づけられた認知、情動、行動を自分で生起させ維持する過程のことである(シャンク&ジーマン, 2009年, p. iii)。このことから、本研究は、第1に「内発的動機づけ」に注目した。鹿毛雅治は内発的動機づけについて「自己目的的な行動の生起、維持、発展過程」としている。学習意欲の観点からは「自己目的的な学習の動機づけ」という意味になる(鹿毛, 2013, p. 195, 傍点は原文)。鹿毛は、教育評価の「情動的機能」を「教育評価が、学習の遂行に関する情報を提供することを通して、学習者に有用感を感知させ、内発的動機づけを高める機能」

(鹿毛, 1996, p. 79) と定義した上で、内発的動機づけの研究を通して評価教示の効果について次のようにまとめている。すなわち「本研究では、到達度基準が情報的機能を持つことが示唆された。このことは、評価のあり方に関して次の2つの示唆を与えると考えられる。1つは個人内の基準に即してフィードバックを与えることの重要性である。個人内の基準は、相対評価のような個人間の基準に比べ、強制感を低めると考えられる。もう1つは学習内容に即した到達度の情報をフィードバックすることの重要性である。評価がこのような情報をフィードバックすることによって、学習者の中で学習内容との認知的な相互交渉が活性化され、『できた』『わかった』という有能感や学習環境と関わっているという効力感が高まると考えられる。また、自己評価による到達度評価が、思考過程重視の態度を高め、特に学習意欲の低い学習者の内発的動機づけを高めたことは特筆に値する。到達度評価の過程に学習者自身が関与することが、到達度評価の情報的機能をより促進すると考えられるのである」(同上書, p. 218) と結論づけている。鹿毛の研究から、内発的動機づけを高めるためには個人内の基準に即して自己評価を行うことが有効であることが示された。

(2) 自己評価活動の教育的な意義

梶田叡一は、自己評価活動の教育的な意義について次の5つの視点からまとめている。

- ① 自分自身を振り返って自分なりに吟味してみる機会を提供する、という点である。自己を対象化してみる機会を持てる、ということであるといってもよい。授業の中で、また学校生活の様々な活動の中で、自分なりに頑張っているように思っているとしても、時にはその自分なりの頑張りの様子を見つめ直すことが大切なのである(図表1参照)。[中略]こうした「振り返り」が、自分の認識の仕方について認識し、自分の学習の仕方について学習する、という点を持つという点からいえば、自己評価とは、何よりもまず、「メタ認識」



図表1 自己評価活動の心理的過程
(梶田, 1994, p. 220)

「メタ学習」を成立させるきっかけを与えるもの、とあってよいのではないだろうか。

- ② 自己評価が外的な評価の確認を伴った形でなされるならば、独りよがりでない客観的な妥当性を持つ自己認識を成立させていく上で貴重なきっかけを与えてくれるものになるであろう。[中略]さまざまな形で外的客観的な視点を自己イメージ、自己概念の中に絶えず組み入れていくことによってはじめて、自己評価が単に独善を強化するものになってしまうことを防げるのである。
- ③ 自己評価のために設定された項目や視点に沿って自分自身を振り返ってみることで、自分のあり方を分析的に吟味し、これまで意識していなかった面に新たに気づき、またそこに潜む問題点があれば、それをはっきりさせることができるであろう。
- ④ 自己評価は自己感情を喚起し、深化する、という点に注目しておく必要がある。自分自身を振り返って点検し吟味していく中で、自分のあり方についての満足感、不満

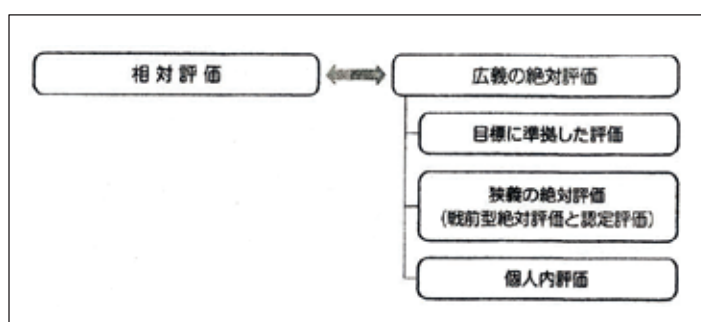
感、反省感、等々が生じてこざるをえない。こうした感情は、もっと深化していけば、自負や誇り、自信や効力感、あるいは無力感や自己不安感、などといった自己評価の感覚になっていく。

- ⑤ こうした過程の総仕上げとして、一人ひとりが自分の次のステップについて新たな決意、新たな意欲を持つ、ということになってほしい。自己評価の結果を生かして、自分が当面取り組むべき課題が何であるのかをはっきりと認識し、その方向に向かって新たなやる気をふるい起こして立ち向かう、ということになるのではなくては困るのである。(梶田, 1994, pp. 220-223)

これらの記述から、自己評価は「自ら学習を調整する」面と「粘り強く学習に向かう」面における意義が大きく、また外的な評価を伴った形でなされることが重要であるということが言える。そこで、次に個を重視する外的な評価である「個人内評価」に注目したい。

(3) 個人内評価

石井英真の整理に基づく、個人内評価は絶対評価に含まれる。絶対評価という言葉が日常に使われるとき、そこには本来区別すべき3つの評価観（目標に準拠した評価・狭義の絶対評価・個人内評価）が混在している。相対評価と合わせると、図表2のような関係になる。個人内評価は、共通の目標に準拠するのではなく、子ども（個人）それ自体を規準とし、その子ども



図表2 4つの評価観の相互関係
(石井, 2022, p. 27)

なりのもち味、がんばりを継続的・全体的に評価するものである。さらに、個人内評価には縦断的個人内評価と横断的個人内評価がある。前者は、学期始めには20点しかとれなかった子どもが、学期終わりには50点をとれるといった具合に、過去のその子どもの実態と比べてその進歩の状況や変容を評価するものである。後者は、この子どもは計算が苦手だけれども作文は上手に書けるという具合に、その子どもの得意・不得意や長所・短所を明らかにするものである。(石井, 2022, pp. 26-29)

上記を踏まえて、本研究では個人内の基準に基づいて評価を行うことが生徒の自学自習を促すために最適であると考え、縦断的個人内評価に着目することがよいと考えた。

3 具体的な研究上の問い

以上の概念整理に基づき、本研究では次の問いを設定する。

教師による縦断的個人内評価と生徒自身による自己評価のサイクルは、生徒たちの自学自習のあり方にどのような影響を与えるのか。

4 実践研究デザインの構想

(1) 教育実践について

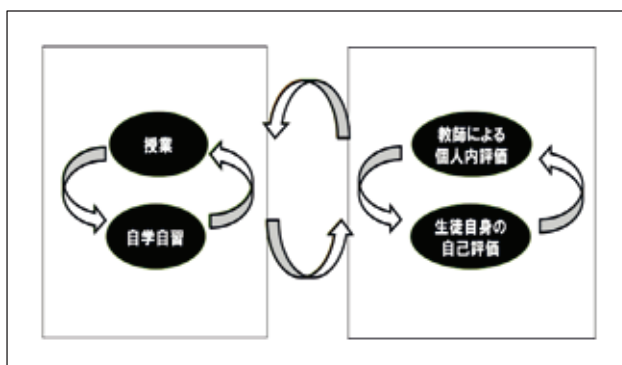
著者は数学を担当しているため、数学の学習に対する評価を通して研究を行う。まず、年度始めの授業で生徒に目指す自学自習の姿を提示する(フィードフォワード)。授業外の時間を用いて生徒と面談をし、教師による生徒に対する個人内評価を行う。その評価を踏まえて生徒が学習を進め、生徒が自身の自己評価を行い、教師に伝える。その後、

再び教師による個人内評価を行う（フィードバック）。この流れを、授業を担当している生徒一人ひとりを行う。図表3のように、授業・自学自習のサイクルと並行して、教師による個人内評価・生徒自身の自己評価のサイクルを行うことにする。

（2）検証方法

生徒の変容を、次の方法で検証することとする。

- ① 年度の始めにアンケート調査を行う。
- ② 定期的に生徒と面談を行い、その時の生徒の発言を記録し、その内容を比較することで生徒の変容を分析する。
- ③ 年度の後半に再度年度始めと同じ内容のアンケートを実施する。
- ④ ③のアンケートの後に、その変容を分析すると共に、2回のアンケートの記述を生徒に見せ、生徒自身にその変容を自己評価させる。



図表3 研究活動のデザイン

5 年度始めの実践

1学年の年度始めの授業において、アンケートを行った。このアンケートは、一切指導をしていない段階で行った。アンケートの質問内容は、①自宅における数学の学習の様子について、「宿題と予習」「宿題と復習」「宿題と予習・復習」「宿題と予習・復習・自主学习」「宿題と試験前のみ」「試験前のみ」「予備校・塾中心」「何もしない」の中で最も近いものはどれか。②「自学自習」をどのように捉えているか。③数学の「自学自習」の達成に向けてどのように取り組んでいるか。④数学の「自学自習」の達成に向けて今後どのような取り組みを行っていきたいか。以上の4つの項目で行った。このアンケートの後に、フィードバックとして生徒に目指してほしい自学自習の姿を提示した。その内容は以下のとおりである。

「本校では、自学自習を掲げている。自学自習の達成のためには、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に向かう力を身に付けてほしい。そのためには、自分の学習を振り返り、自己評価することができるようになってほしい。自分の学習を定期的に振り返り、自己評価することで、自分の学習を改善していけるようになってほしい。」

このことは年度始め以外にも定期的に全体指導の場で生徒に伝えている。その後、年度途中で定期的に面談を行い、生徒の自己評価に対して教師の評価教示（個人内評価）をフィードバックしている。以下、2名の生徒についての概況を報告する。

6 生徒Aの事例

生徒Aは電車で通学しており、始発で登校し、登校後は朝のショートホームルームの時間まで毎日1時間半程度学習をしている。図表4のアンケート結果のとおり、年度始めから学習の習慣が身に付いているように感じていた。生徒Aの面談の内

①数学の自学自習の様子	宿題と予習・復習・自学自習
②自学自習をどのように捉えているか	人に言われてやるのではなく、自分から進んで学習すること。
③数学の「自学自習」の達成に向けてどのように取り組んでいるか	数学の授業のある前日に予習をし、授業後に復習をすること。分からなかった問題や解けなかった問題は何度も繰り返し解いて、理解できるまでやり続けること。
④今後どのような取り組みを行っていきたいか	毎日、最低でも1時間は数学の勉強をすること。基本問題だけでなく、応用問題も積極的に取り組むこと。

図表4 生徒Aの年度始めアンケートの結果

容を次の図表 5 に示す。5 月の実力テストが行われた後に面談を行った。生徒 A は自身の学習の振り返りで、難しい問題を避けていたということと話していた。A との普段の会話や朝の学習の様子などから、学習の習慣は身に付いており、基礎・基本は定着していると判断し、その旨を伝えた上で、応用にもチャレンジし、じっくりと考える時間を大事にしてほしいということフィードバックした。その後、1 か月程度経過した後、改めて教科の面談を行った。その時に、A に学習に関する自己評価を求めたところ、難しい問題に挑戦することが前よりも抵抗がなくなり、数学が楽しいと思えるようになったと話していた。そこで、A の取り組みに対して、継続して取り組めば成果になるときが来るから継続していこうとコメントした。夏休みを挟み、再度面談したときに自己評価を求めた際には、夏休み中は学習時間が減ってしまったが、その反省を踏まえて夏休み後は必ず毎日数学の学習をするようにしていることを話していた。そして、学習の時間の使い方も工夫されていた。時間を十分とれる休日に発展的な内容を中心に取り組み、平日は比較的短い時間で完結するような基礎の確認などを行うようにしていた。そこで、A が自分の学習を振り返りながら行っていることが良いということ伝え、これからも続けてほしいことを伝えた。

年度後半に、年度始めと同じアンケートをとった結果は図表 6 のとおりである。図表 4 と比較すると、②の回答が隙間時間の活用についての記述に変化している。また、③の質問の回答が「毎日必ず 1 ページは問題を解くこと」と簡潔なものとなっていた。また、年度途中の面談までは発展的な問題に挑戦することで数学が楽しくなってきたと話していた事に対し、④の基礎をおろそかにしないという回答が対照的である。

このアンケートの後、年度始めのアンケートの記述を提示し、年度始めと現在でどのように変化したかを記述させた。その内容を図表 7 に示す。この回答を見ると、生徒 A が年度始めに掲げていた事は、当たり前のことになっており、そこからさらに時間の使い方を工夫して取り組むことであると捉えるようになったようである。生徒 A は元々朝早く登校し、ショートホームルームの時間まで学習をしており、時間の使い方を工夫していた。今回の記述を見ると、そこから更に小さな使える時間を大切にするようになったと解釈でき

5月の面談の記録	
生徒:	テストは基本的なところはよくできたけれども、難しい問題が出来なかったです。
教師:	難しい問題ができるようになるにはどうすればいい？
生徒:	チャート[本校で使用している副教材]をやるときに、難しい問題を避けていたから、やるようにすればいいと思います。
教師:	今は学習時間も確保できていると思うし、基本的なことは身に付いていると思うから、応用とかにもチャレンジしていこう。ああでもない、こうでもない考える時間は学習する上で大切だから、今後はそういう時間を大事にしてほしい。
6月の面談の記録	
教師:	最近、どういふうに数学を勉強している？
生徒:	チャートの難しいところを前よりも嫌がらないでできるようになったと思います。少しは難しい問題に抵抗がなくなりました。
教師:	そのことで自分の勉強が変わってきたと思うことはある？
生徒:	難しい問題もやるようになったから、数学が楽しいと思うようになりました。
教師:	これから、どういふうにしていきたい？
生徒:	これからは点数自体を上げられるようにしていきたいです。
教師:	楽しいと思えるようになって、じっくり考えて問題に取り組んでいけば、それが成果になるときがくるから、継続してやっていこう。
夏季休業明けの面談の記録	
教師:	夏休みとか、今の自学自習は、自分で評価するとどう？
生徒:	夏休みは自分で勉強する時間が減ってしまいました。
教師:	夏休み、そうだったのなら、夏休み明けてからどうしている？
生徒:	今は毎日絶対にチャートをやるようにしています。
教師:	チャートをどういふうに使ってやっている？
生徒:	平日は印3つの問題をやって、土日に印4つと5つをやっています。難しいのは時間がある土日にやるようにしています。
教師:	[本校で使用している副教材は問題の難易度を5段階の印で示している]夏休みを振り返ってその後は必ず毎日勉強するようにしているということは、すごく良いと思う。勉強していることもとても良いし、過去の自分の学習を振り返ってこれからの学習に結びつけているのも良い。あと、勉強の仕方も前と変わってきている。時間をとりにくい時には基本的な内容を中心に行って、時間のとれるときにじっくりと考える問題に取り組んでいるのは、学習の方法としてよく工夫されている。だんだん学習の仕方が工夫されているものになってきていると思うから、これからは定期的に自分の学習を振り返るようにしよう。

図表 5 生徒 A との面談の内容

①数学の自学自習の様子 宿題と予習・復習・自学自習
②自学自習をどのように捉えているか スキマ時間を有効活用して単語帳を覚えること。
③数学の「自学自習」の達成に向けてどのように取り組んでいるか 毎日必ず1ページは問題を解くこと。
④今後どのような取り組みを行っていききたいか 基礎をおろそかにしても応用・発展は解けないため、基礎問題を多く演習し、定着させること。

図表 6 生徒 A の年度後半のアンケートの結果

る。このことを踏まえて、どのように変容したか、自身の言葉で話してもらうため、面談を行った。その内容は図表8のとおりである。英単語などを覚えるためには、短時間の繰り返しの学習の方が良いと考えているためであった。さらに、積み重ねや経験により考え方がすぐに出てくるようになりたいということをお話しており、図表6で「基礎をおろそかにしても応用・発展は解けないため、基礎問題を多く演習し、定着させること」と記述したようである。自学自習の経験から、応用力を付けるためには基礎の徹底が大切であるという結論に至ったようである。

生徒Aは教師の助言を素直に実行する。Aは年度当初から教師によるフィードバックを行う前から自ら進んで家庭学習を行っていたが、初めは難しい問題にチャレンジせず、解きやすい問題を中心として

取り組んでいた。そのことについて前述のようにフィードバックしたところ、粘り強く取り組む姿勢を身に付け、考えることの楽しさを見だし始めていると考える。その後、考え方がすぐに出てくるためには反復することが大切だと考えて、基礎の大切さを再認識したと解釈できる。問題への取り組み方については試行錯誤している段階ではあるが、学習する手段を自ら考え、実践する姿勢が身に付いてきている。このことから、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に向かう態度を身に付けることについて成果が見えてきていると思う。教師による縦断的個人内評価と生徒自身による自己評価のサイクルを繰り返す中で、生徒が変化してきている事例であると考えられる。ただし、生徒Aの変容がすべてこのサイクルによるものであるとは断言できない。学校生活の中では教師との関わりの他に様々な関わりがある。クラスメイトとの関わりや、学校行事での気づき等、様々な経験を経て生徒は成長する。例えば、別の生徒との面談では「周りの生徒の勉強する姿勢が刺激になって自分も勉強するようになった」とや「部活動の先輩が色々なことを知っていて、その影響で新聞を読む習慣がついた。新聞を読むことも自学自習だと思う」と話している生徒もおり、このことから、様々な要因が重なって生徒が変容していることがわかる。多面的で複雑な周囲との関わりの中で生徒は多様な経験をしており、幾つもの要因が重なり合って生徒の学習に対する考え方や実践は変化しているが、今回の生徒Aの事例は、自学自習の習慣を確立させる過程で教師の関わりが影響を及ぼしているであろうと考えられる事例であると解釈した。生徒Aの事例は本研究上の問いに対する一つの答えを示唆していると考えられる。

①高校入学時から現在までの間に、自身の「自学自習」に対しての考え方はどのように変化したか。

入学当初は人から言われてやるのではなく自分から進んで学習するものだと思っていたが、現在は「自学自習」というものは自ら進んで取り組むのは当たり前で、スキマ時間を見つけて単語を1つでも覚えることと思うようになった。

②高校入学時から現在までの間に、自身の「自学自習」の達成に向けての取り組みはどのように変化したか。

当初は予習→授業→復習というスタイルでやってきたが、現在はもちろん予習もするがそれよりも復習と演習のサイクルが大切だと気づいたため予習→授業→復習+演習のスタイルで行うようになった。

図表7 生徒Aの変容についての記述

11月の自学自習に関するアンケートの後の面談

教師:	4月に書いたものと11月に書いたものを比べて、入学時と今では自分の自学自習がどのように変わったか話してみよう。
生徒:	前までは隙間の時間を意識していませんでした。10分とかで変わるのかなを思っていたが、今は休み時間や電車の時間を使うことで定着しやすいと思っています。
教師:	なんで定着しやすいと思うか。
生徒:	短時間の繰り返しのほうが英単語とかは覚えやすいと思います。数学などはまとめた時間をとって続けて行って、英単語とかを短い時間で繰り返して進めて行っています。
教師:	他には考え方などで変わったところはある？
生徒:	授業の後に今日授業で習ったところをすぐに定着させた方が考え方がすぐ出てくるようになると思います。基礎の積み重ねや経験が物を言うと思います。
教師:	新しいことを考えるときは過去の経験を用いて考えるというのも大事だね。すぐに復習することの積み重ねがアイデアを出す力やスピードに繋がると思うよ。

図表8 11月の生徒Aとの面談の内容

7 生徒 B の事例

生徒 B は電車で通学し、生徒 A と一緒に毎朝 1 時間半程度の学習をしている。図表 9 の生徒 B のアンケートからは、自学自習について、「理解できる」、「解ける」など、学習の過程よりも結果についての記述が多いと感じた。学校で定期的に行っている学習時間の調査からは、家庭学習も継続して行っている様子が見えてきた。生徒 B との面談の内容は図表 10 に示す。5 月に行った面談では、学習の取り組みが不十分であることを話していた。ここでは、テストが終わってから自分の学習を振り返った時に、もう少しやればよかったということと、家で勉強した内容が頭に入っていなかったという事を話しており、そのためには時間が経ってから復習するのではなく、学習した内容はすぐに復習したいという事を話していた。そのため、具体的に振り返ることができていると評価し、是非実行してほしいと話した。しかし、これ以降の面談でも、十分に学習をすることができていない旨の発言を繰り返していた。普段の生徒 B の様子を見ると、学習する習慣が身に付いているように見えていたが、生徒 B は自身の学習に対して否定的な発言を繰り返していた。そこで、ホームルームの活動で学習の記録をしたときに、実際に B が記録した 1 週間の記録をもとに、B と話をしたときの内容から、B は学習時間の多い少ないではなく、学習内容を十分に定着させられていないことで、学習する習慣が身に付いていないと考えていると解釈した。そこで、B には自己評価の際には自分ができる範囲の中でしっかりと学習することができていること等達成できた部分を考えることが大切であるとコメントした。なお、暫く経過してから日常の会話で数学の家庭学習の状況を聞いた時には、少しずつ分かってきて楽しくなってきたという発言も見られた。

①数学の自学自習の様子 宿題と試験前のみ
②自学自習をどのように捉えているか 自分が理解できていないのかを確認し、理解できるようにすること。
③数学の「自学自習」の達成に向けてどのように取り組んでいるか 参考書や問題集を解く。友達や家族に聞く。
④今後どのような取り組みを行っていきたいか 参考書や問題集を解く際にわからなかった問題を自力で解けるまで何度もやる。

図表 9 生徒 B の年度始めのアンケートの結果

5月の面談の記録	
生徒:	(実力テストを振り返って)チャート[本校で使用している副教材]の例題と練習をやって、答えを見てもう1回解き直すというのを繰り返していたけれども、今考えればできなかったところはもう少しやればよかったと思っています。
教師:	やれなかったと思うところをもう少し詳しく話してみよう。
生徒:	家に帰ってから数学を勉強していたけど、頭に入っていなかったです。
教師:	なんでだと思う？
生徒:	休日にまとめて勉強していたけど、時間が経ってから復習すると、内容がよくわからなくなっていました。
教師:	それを踏まえてこれからどうしていきたい？
生徒:	その日のうちに内容を振り返るようにして、毎日やるようにしていきたいです。
教師:	とても大切なことだと思うし、自分の勉強を具体的に考えていることはとても良いと思う。ぜひやってほしい。
6月の面談の記録	
教師:	タイムリーな復習はできるようになったかな？
生徒:	その日の復習をすぐにやるのは難しいと思います。毎日復習する習慣がついていないです。
教師:	そうであるなら、夏休みは習慣をつくるチャンスかもしれない。自分の時間が多くとれるから、毎日自学自習をする習慣を付けよう。
夏季休業明けの面談の記録	
教師:	今の自分の自学自習について、どう思っている？
生徒:	タイムリーな復習ができていないです。すぐにやるのは難しいことだと思います。習慣がついていません。
教師:	自分ではどのようにしていきたい？
生徒:	やれるようにはなりたいです。
教師:	振り返るときに、自分のできたところとかも考えてみよう。もっとこうしたいけれど、できなかったということだけでなく、ここができたという部分はどこだったかを振り返るときに考えるようにしよう。
インフォーマルな場面での対話	
教師:	前に面談で思うように勉強できていないといってたけれども、その後は満足にできている？
生徒:	できていないです。
教師:	学習の記録をみると、私は時間はとれていないわけではないとは思いますが、できていないと思っている？
生徒:	始発で学校に来るには、10時に寝ないといけないから、夜は勉強ができたとしても2時間しかできないです。
教師:	朝に始発で来た後、毎日教室でホームルームの時間まで勉強しているよね。そこで1時間以上勉強しているから、トータルでは勉強しているようにも思うけれども。
生徒:	でも、授業の復習とかは間に合っていないです。
教師:	なるほど。じゃあ、こういう質問だとな。通学時間などの、今の自分の生活環境に対してだと、勉強に使える時間は確保できているかな？
生徒:	それだと十分やっているといます。
教師:	寝る時間を削るとかで、今の生活サイクルを変えるのはよくない。それなら、今の生活環境で十分やれていると思うなら、それは自信をもってできていると評価しても良いと思う。今はやりたいことに対して十分やりきれていないかもしれないが、粘り強く続けていけば少しずつ力がついてくるから。自己評価をする時は、改善点を探すこと他に、自分が達成できた部分を考えることは大事だよ。

図表 10 生徒 B との面談の内容

生徒 B が自身の学習に対して達成できた部分を実感することができるように支援を続けていきたいと考えた。

年度後半に、年度始めと同じアンケートをとった結果は図表 11 のとおりである。図表 9 と比較すると、復習を意識していることが分かる。年度途中の面談でも、自身の取り組みに満足していない部分はあるものの、復習に関するコメントが多かった。

このアンケートの後に、年度始めのアンケートの記述を提示し、年度始めと現在でどのように変化したかを記述させた。その内容を図表 12 に示す。この記述を見る限りは、自学自習の達成に向けた取り組みについて達成できた部分を感じることができたかのように思えた。

この後、生徒 A と同様に、面談で年度始めからの変容について自身の言葉で話してもらった。その内容は図表 13 のとおりである。生徒 B は春から自分が変化していないということを話しており、図表 11 の変化した部分について聞いても、「変わったところもあるかもしれないが、高校に入ってから一つ一つの授業の予習・復習をやりきれていない。今でも解決できていない。ずっと悩んでいる」と話していた。そこで、まずこの悩みを解決するためには何かできそうなところはないか聞くと、いつも苦手な数学を後回しにしているため、そこを変えたいと言ったため、それを実践してみようと言った。

ここまで、自身の取り組みについて消極的な発言が多く、現状その解決には至っていない。年度当初のアンケートの段階から過程よりも結果に焦点を当てている傾向があり、それが現在も続いているように感じる。自身の取り組みの過程に対してできたこと、達成度を感じることができずにいるという状態である。そのような点で、生徒 A とは対照的である。しかしながら、生徒 B は、言葉で自己評価する場面では否定的な発言が多いのに対して、アンケート等で文章による記述をさせると、達成できた部分を記述している。今後は、この部分を生かして達成感を実感できるような評価教示を行っていく予定である。とりわけ本生徒に対しては、継続して指導を続けていきたい。

① 数学の自学自習の様子 宿題と復習
② 自学自習をどのように捉えているか 自分にとって足りない知識、理解を把握し、それを補う勉強のこと。
③ 数学の「自学自習」の達成に向けてどのように取り組んでいるか 授業で解説された問題や内容の復習を中心に、教科書、問題集の復習。
④ 今後どのような取り組みを行っていききたいか 上記に合わせて、その問題に対応した応用問題を解く。

図表 11 生徒 B の年度後半のアンケートの結果

① 高校入学時から現在までの間に、自身の「自学自習」に対しての考え方はどのように変化したか。 「自分の足りないところを補う」という考え方は変わっていないが、「自分に合わせて学習を調整する」という意識をもつようになった。
② 高校入学時から現在までの間に、自身の「自学自習」の達成に向けての取り組みはどのように変化したか。 漠然と「問題を解く」のではなく、授業に合わせた勉強に変わった。粘り強く勉強する意識から、授業に合わせた勉強以上の勉強まで意識が向くようになった。

図表 12 生徒 B の変容についての記述

11月の自学自習に関するアンケートの後の面談	
教師:	4月に書いたものと11月に書いたものを比べて、入学時と今では自分の自学自習がどのように変わったか話してみよう。
生徒:	考え方は4月からあまり変わっていません。4月と11月に書いたことがほぼ変わってなくてびっくりしました。
教師:	少し前に変化したところを書いたときは、自分の変化したと思うところもかいていたけれども、そこはどう思う？
生徒:	変わったところもあるかもしれないけれども、高校に入ってから一つ一つの授業の予習・復習をやりきれていないです。今でも解決できていないです。ずっと悩んでいます。
教師:	では、春から自分で良くなったと思うところはあるかな？
生徒:	隙間の時間を使えるようになりました。
教師:	時間の使い方を工夫するようになったという事だと思う。それでは、時間を増やす事以外で、先ほどの悩みを解消するために何かできそうなところはあるかな？
生徒:	平日の家に帰ってからの勉強を変えていきたいです。今まで家で数学を一番後回しにして勉強してきたからそこを変えたいです。
教師:	後回しにしがちな教科から先に取り組むのは、良いと思う。実践してみよう。

図表 13 11月の生徒 B との面談の内容

8 他の生徒の事例

「自学自習」の考え方はどのように変化をしたかについて、生徒A、生徒B以外の生徒2名の記述を図表14に示す。生徒Cは、面談では自己評価についての発言を求めても「できなかった」で終わるなど、具体的に話を積極的にはしようとはしない生徒である。この記述では、「(自学自習の捉え方について)授業のためだけの勉強ではないとこの7か月で気づけたと思います」など、自学自習の捉え方と実践について具体的に記述している。先の生徒Bの場合は、口頭では肯定的な自己評価が見られないのに対して記述では少しは肯定的な記述をしていた。この2名の事例のように、口頭ではあまり具体的に発言しない生徒でも、紙への記述で具体的に記述する場合もある。このことから、自己評価の際には、面談での発言だけでなく、記述する場面を設定するなど、複数の機会を設けることが生徒の自己評価を促すために必要ではないかと考えた。

生徒C	<p>①高校入学時から現在までの間に、自身の「自学自習」に対しての考え方はどのように変化したか。 授業の予習・復習をするという考え方から、自分で判断して積極的に勉強をするという考えに変化していました。授業のためだけの勉強ではないとこの約7か月で気づけたと思います。ですが、捉え方だけでなく実行することもとても重要だと思いました。”粘り強く”という部分が頭では理解できていても、自分がやれているとなるとなげげません。4月から感じている「わからない問題を理解し、できるようにすること」は今でも大切だと思います。ですが、4月時点と比べると今でもその考えは弱くなっていたと思います。ですから、この機会に思い出すことができてよかったです。4月の時から変化したこととしていないことこれからの積極的な学習に取り入れていきたいと思いました。</p> <p>②高校入学時から現在までの間に、自身の「自学自習」の達成に向けての取り組みはどのように変化したか。 大きく見ると、何も変わっていないなと思いました。学習に対する意欲や理想は4月よりも高くなっていますが、教科によつての勉強量が違いすぎると思います。もっと成績を伸ばし、精神的にも成長するためには苦手な理系科目の勉強も積極的に行い必要があると感じます。日々の学習時間の平均は2時間と延びてはいますが、これからは大事な時期だと思うので、3時間をマストにし、安定した成績をキープしたいなと思いました。また、授業の復習が一番大切だとわかっていながらも、あまり時間を取れていないので、優先して時間を使うように試みようと思いついて、あまり時間を取れていないので、優先して時間を使うように試みようと思いついて、ワークやプリントなど各教科ごとに同じくらい、苦手な科目はもっと多くの勉強時間を確保し、持続していきたいと思つきます。</p>
生徒D	<p>①高校入学時から現在までの間に、自身の「自学自習」に対しての考え方はどのように変化したか。 単純に自分から進んで勉強するだけでなく、部活などのやらないといけない事がある中で、空いている時間を自分で見つけて、自分で上手く調整することも「自学自習」において大切だということに気づいたのが変化だと思つ。</p> <p>②高校入学時から現在までの間に、自身の「自学自習」の達成に向けての取り組みはどのように変化したか。 前よりは積極的に[チャート[本校で使用している副教材]]に取り組むようになったと思う。また、分からないところも理解できるようにするだけでなく、計画的に進めようとするところも変化したと思つ。</p>

図表 14 他の生徒の自学自習についての記述

生徒Dは「調整」ということを記述している。フィードフォワードとして「本校では、自学自習を掲げている。自学自習の達成のためには、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に向かう力を身に付けてほしい。そのためには、自分の学習を振り返り、自己評価することができるようになってほしい。自分の学習を定期的に振り返り、自己評価することで、自分の学習を改善していけるようになってほしい」という目指す姿を提示し、このことは繰り返し生徒に訴えていたが、この中の「調整」という言葉を用いて記述していることから、教師の言葉の影響を受けて考えている可能性がある。図表12の生徒Bの記述にも「調整」という言葉がある。これらのことは、教師のフィードフォワードが生徒に影響を与えていることを示唆していると考えられる。目指す姿を提示することで、生徒がどのような自学自習を目指すかを具体的に考えやすくなっているということである。

9 本実践研究における成果と今後の課題

生徒Aは自学自習観を順調に深化してきており、実践することができている。その一方で、生徒Bは現状苦勞しており、現状は具体的な打破へは結びついていない。この2名は対照的な結果となった。ただし、生徒Aも基礎と応用のバランスには試行錯誤している最中である。生徒Bのように苦勞している生徒は他にも多数おり、すべての生徒が卒業までに自らの自学自習観を確立できるように、様々なアプローチを試していく必要があるだろう。

う。

本研究を通して、次のことが示唆された。

- ① 生徒 A の事例から、教師による縦断的個人内評価と生徒自身による自己評価のサイクルは、考える機会となり、自学自習を深化させるきっかけとなり得る可能性がある。
- ② 一方で、生徒 B のようになかなかきっかけを掴むことができない生徒もいる。また、生徒 C のように面談よりも記述で自己評価をする方がより具体的に表現することができる場合もある。
- ③ フィードフォワードとして、目指す姿を提示することで、生徒がどのような自学自習を目指すかを具体的に考えやすくなっている可能性がある。

これらの3つの事柄は、すべて教師と生徒の関わりの中での事である。生徒の自学自習を促すためには、多面的な教師の関わりが必要不可欠であるといくことを、本研究の結論としたい。

今日、様々な場面で個の見取りについての重視が述べられている。例えば、鹿毛は「個別最適な学び」について問う中で、「日常的な生活の様々な場面で『個』をまるごととらえることこそが『個』の重視であり、そのためには当人との関係性を保ち、当人をトータルに理解しようとする他者の存在」つまり「人としての教師」が欠かせないと述べている（鹿毛，2021，p. 51）。自学自習の促す場面においても、教師の存在について問うことは、意義のあることだと考える。本研究を通して、そのことを考察し、自学自習の達成に向けての教師と生徒との関わりについて本校教員と共有することは、学校教育目標達成に向けて意義のあるものだと考える。今後は、教師による縦断的個人内評価と生徒自身による自己評価のサイクルを継続し、引き続き生徒の自学自習を促していく。その際に、個々の生徒がどのような場面で自己評価を具体的に考察することができるかを考え、一人一人に応じた指導をする。さらに、今回の研究や個々の生徒についての変容を教員間で共有することにより、学校教育目標の一つである「自学自習」について、学校全体で深めていく必要がある。

参考文献

- ・石井英真「教育評価の立場—評価の物差しにはどんな違いがあるのか—」西岡加名恵，石井英真，田中耕治編『新しい教育評価入門 人を育てる評価のために 増補版』有斐閣，2022年，pp. 25-51。
- ・鹿毛雅治『内発的動機づけと教育評価』風間書房，1996年。
- ・鹿毛雅治『学習意欲の理論 動機づけの教育心理学』金子書房，2013年。
- ・鹿毛雅治「人と多様性，多面性と授業 —教育心理学の観点から—」日本教育方法学会研究推進委員会編『フィールドワーカーとしての振る舞い（教育現場との付き合い方）について考える 個別最適な学びをどう受け止めるか（日本教育方法学会第24回研究集会報告書）』2021年，pp. 39-53。
- ・梶田叡一『教育における評価の理論 I 学力観・評価観の転換』金子書房，1994年。
- ・ディル・H・シャンク，バリー・J・ジーママン編著（塚野洲一編訳）『自己調整学習と動機づけ』北大路書房，2009年。
- ・中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」，2011年。
- ・中央教育審議会『「令和の日本型教育」の構築を目指して（答申）」，2021年。
- ・藤田晃之「キャリア教育とは何か」日本キャリア教育学会編『キャリア教育概説』東洋館社，2020年。